

供物

僕の目の前に、ママは自転車とかかれた手作りのカードを差し出した。僕は、じてんしゃ、と答えた。次にママは薔薇と書かれたカードを出した。僕は、ばら、と答えた。ママは笑って、手帳に「たいへんよくできました」の判子を押した。

その日の夜に、僕はお風呂で九九を唱えながら、テレビで見た猿のことを考えた。猿は猿回しのお姉さんの合図でいろいろな芸を見せた。猿が何かするたびに、テレビに出ているタレントは口を大きく開けて笑って白すぎる歯が見えた。ママとパパも笑っていたけれど、僕はうつむいていた。言うまでもなく、あの猿は僕と似ていたから、僕には猿の悲しみが理解できたのだ。

顔が火のように熱くなってきた汗が目に入った。僕の口は七の段を唱え始めていた。

七の段は一番難解でとっつきにくい。八の段のようなテンポの良さも無ければ、九の段のような美しい対称性もない。四十二、四十九という数字は恐ろしい何かを想起させるし、全体的に不揃いで奇妙だ。グロテスクと言ってもいい。グロテスク。

グロテスクという言葉は僕はいとこの純平くん聞いた。純平くんは中学二年生だけど、大量の「グロテスク」な画像をパソコンに集めている。以前、こっそりそのコレクションを僕に見せてくれたことがあったが、そのとき僕はあまり驚きもせず気味悪がりもしなかった。そしてそのことが純平くんの大切な何かを傷つけた。きっと僕は分かってそうしたのでだろう。それ以来、純平くんには遊んでもらっていないが、ママから聞かされた話では引きこもりになったらしい。



僕は寝る前、いつも小さな木箱の前に座って祈りを捧げる。と言っても手を合わせたりの辞儀をしたりはしない。そんなことには意味がない。ただ目をつむって想像する。はじめは木箱の中にあるものと、それを密閉している木箱の固さ、冷たさなどを。次にもっとも大きなものを想像する。それは綺麗で触ることのできないものだ。そうしてだんだんと集中が深まってくると、その大きなものが僕自身の空白にびつたりと照合する。その瞬間は本当に甘美で、永遠だ。全身に鳥肌が走って、僕は思わず身震いする。

この儀式において最も重要な点は、常に心の中に、その大きなものを座らせるための

スペースを確保していなければならないということだ。スペースは広ければ広いほど好ましく、そこにはいかなるものも置いてはならない。



僕が自分の心の中にスペースを手に入れたときの話をしよう。

その日、幼稚園の帰りのバスの中は、西日が強く差しして排気ガスの匂いが充満していた。僕の額には汗が滲んで、激しい揺れに吐き気が襲った。バスは豚小屋の前に差し掛かり強烈な匂いがする。後ろの星野くんがおえーつと吐く真似をした。笑い声が起る。乱暴な運転で、ママが鞆につけてくれたお守りが揺れた。紫色の布地に金の刺繍がほどこされたそのお守りは、強い日差しの中で角度によって様々な色味を映し出す。そのきらめきを見てみると、豚小屋も星野くんも消えてしまう。そして僕はママがお守りを付けてくれたときのことを思い出す。

「中に何が入ってるの？」

僕がそう尋ねるとママは一寸黙って、神様が入ってるのよ、と答えた。そして決して開けてはいけないと続けた。

頬が太陽で焼け付き、まぶたの上に汗のしずくが流れるのを感じた。豚と排気ガスと人間の匂いがバスの中でかき混ぜられて一体になる。激しい揺れはお腹に響いて、下腹のあたりがむずむずする。僕は何かに耐えられなくなって、震える手でお守りを掴んだ。そうして、固く縛られた紐の隙間に爪をねじ込んで、お守りを開けた。僕はおそろおそる中を覗き見た。しかし、そこにあっただのは神様などではなく、ただの厚紙に過ぎなかった。汗に濡れた指先が熱を失っていくのがわかった。再びいろいろなものが僕から遠ざかっていくその中で、自分の太ももに当たる熱い感触だけがはっきりしていた。

その日以来、僕が手にしたスペースはあまりに大きいため、ママの漢字カードやかけ算九九をいくら詰め込んでも埋まる兆しが見えない。



自分が嫌な人間だと気づいたのは随分と前のことだと思う。今はそのときより自分について考えることが増えたから、もっと大げさに、悪い人間だとさえ言うことができる。そしてこのまま僕が大人になったとき、危険な人間になるだろうということはテレビや

大人がしつこく教えてくれたことだ。

僕には人の気持ちが分かる。多分パパやママよりも分かる。けれどなぜそれを踏みにじってはいけないのかが分からない。僕は痛くなくて、誰かが痛い。それがどうして悪いのかが、僕にはわからない。

遠足で芋掘りに行ったとき、僕の目の前にたえちゃんのお尻があった。そしてその奥には深い窪みがあった。僕は何も考えずに、右足でたえちゃんを押した。たえちゃんは顔を擦りむいて全身泥まみれになった。

またあるときは英会話教室でゆうたくんの自転車の鍵を隠した。ゆうたくんは泣きわめいて大騒ぎし、車で迎えにきたお母さんにぶたれた。僕にはなんの感動もなかった。鍵は帰り道、側溝のなかに捨てた。

十年後、僕が猫を殺すようになり、さらに十年後小さな女の子を殺す。そのときテレビや大人たちの言っていたことはすべて正しかったと証明されるだろう。「たいへんよくできました」。



儀式に必要なもの。

①十センチから十五センチ四方程度の箱。木箱でも金庫でも構わないが、なるべく固くて頑丈なものがよい。また大きすぎると意識を集中させにくいので最大でも三十センチ程度にすること。

②箱を密封するための釘、または接着剤。これは金庫を用いる場合には不要。中に入るものが出てしまわぬように、密封は念入りに行うこと。



次の日の幼稚園では、ちよつとした不愉快な事件があった。僕のお道具箱からハサミが盗まれたのだ。犯人はたえちゃんだった。たえちゃんは以前から友達のをよく盗んで怒られていた。ママは盗癖という言葉と、それが愛情の欠如からもたらされる行動なのだということを教えてくれた。愛情の欠如という言い方が、僕の気に入った。

ともあれ僕が事態に気づいたのは工作の時間だったから、ハサミがないのには困ってしまった。犯人はわかりきっていたけど、僕は何も言わなかった。ただ黙ってうつむい

て、声をかけてきた先生に、ハサミをなくしてしまいましたとだけ言った。先生は大人用の大きなハサミを貸してくれた。

○ ○ ○ ○

クレヨン、連絡ノートに貼られたシール、お花の匂いのするポケットティッシュ、綺麗な石ころ、ビー玉、ハッピーセットのおもちや、タムシの羽一枚、僕のハサミ、他数点。たえちゃんが今年盗んだもののリストだ。

今こうして盗まれた品々を検証してみると、たえちゃんが一体何を欲していたのかわかるような気がする。あるいは何を確かめようとしていたのかが。ママが使った愛情の欠如という言い方は、いい表現だけれど正確とは言えないだろう。

僕の考えではたえちゃんは人間よりも動物に近い。それでもやっぱり僕にはたえちゃんの気持ちがわかる。

ひょっとしたら僕には猿回しの才能があるのかもしれない。僕は自分が猿回しになった姿を想像してみた。案外悪くない。何頭もの猿を役立て芸をさせるのはさぞかし愉快だろうし、そして何よりも、猿回しに七の段は必要ないからだ。

○ ○ ○ ○

儀式にあたっての注意事項

①儀式はなるべく夜に行うのがよい。また歯磨きは事前に済ませておくこと。儀式の最中、ママに邪魔されるのをふせぐためである。

②儀式の途中で寝てしまうのは好ましくない。そのため食後のホットミルクは可能な限り避けること。

○ ○ ○ ○

僕はゆうたくんの自転車の鍵を隠したことはあるけれど、誰かのものを盗んだことはない。

それどころか、何かを欲しいと思ったこともほとんどない。現に鍵を隠したときだって、欲しいなんてこれっぽちも思わなかった。

だけど一度だけ、ママにものをねだったことがある。去年の春、ホームセンターに買い物に行った日のことだ。買い物を終え、車まで戻る道中に庭園コーナーがあった。屋

外の通路に沿って連なるプランターにはチューリップやラベンダーやアネモネなどが咲き乱れ、それらはおびただしい光の中にあつた。

ママはアネモネの球根が並べられた棚の前に立ち止まって、ベランダで育ててみようかしらと言った。僕は返事をしなかった。なぜなら、僕はその脇に置かれた、奇妙な植物に心を奪われていたのだ。

その袋のような形を、僕はテレビで見たことがあつた。食虫植物というらしく、植物でありながら虫を食べるのだそうだ。中でもウツボカズラと呼ばれるものは、袋に虫が落ちてくるのをじつと待ち、そして落ちてきた虫を中の消化液で溶かしてしまうという。袋の中は虫を逃さないように様々な仕掛けがこらしてあり、落ちたら最後だ。アリがもがきながら溶かされていくビデオとともにそう解説されていた。

風がおこつてあたりの花々が春の光とともに揺れたとき、僕の渴いた口は、これが欲しいと言った。ママはとても驚いていたようだった。



結局、僕の望みは叶えられなかった。どうしてこれが欲しいの？と尋ねられた僕は答えることができなかった。僕は真つ赤になつて、自分の発言を撤回した。

その日の夜に一匹の蜘蛛を僕は部屋の隅で見つけた。僕は積み木の入つていた木箱を手にとつて、慎重に蜘蛛の上にそれを被せた。驚いた蜘蛛が、中で動き回る感触が微かに手の中に感じられた。

蜘蛛は箱の中で巣を張つたか、それとも卵を産んだか。日に日に空想は広がり、やがては儀式という形式を取るようになった。



僕のハサミが盗まれた翌日の朝、一本の電話が鳴つた。受話器を取つたママは次第に青ざめていき、電話が終わると僕にすぐ支度をするように言った。まだ朝食にろくに手を着けていなかったけど、僕は言われるがままに支度を済ませ、ママの運転する車でいつもより三十分早く幼稚園に預けられた。おじいちゃんが倒れたそうさ。

おじいちゃんが倒れようと幼稚園でやることは変わらない。歌を歌いながら教室の中を輪になってぐるぐる廻り、外で鬼ごっこをして、この間行つた消防署の絵を描いた。しかし、最後の最後だけが少し違った。

いつものように僕が帰りのバスに乗り込もうとすると、先生がやってきて、お母さんが迎えにくるまで一緒に待つていようと言つた。

迎えを待つ子どもたちの部屋に入ると、たえちゃんがいた。たえちゃんは僕のことを見つけると、慌てて目をそらして、そばにあったコップの中身を飲んだ。

「何飲んでるの？」

「ジュース」

「先生に貰ったの？」

「うん。クッキーもくれる」

僕は知らなかったが、親を待っている子たちにはジュースとクッキーがふるまわれるらしい。たえちゃんはここの常連らしく、そんなことも知らないのかといった顔で微笑んだ。

「僕のハサミ返してくれない？」

僕が試しにそう言ってみると、たえちゃんは顔をしかめて、知らない、と言った。

「誰にも言わないよ」

「知らない」

「ハサミがないと困るんだよ」

「知らない」

そのあと僕が何を言っても、たえちゃんは知らない、の一点張りだった。そしてもう一度、僕が年を押すように、「誰にも言わないよ」と言うと、

「うるさいバカ」

とやってたえちゃんは僕を叩いた。たえちゃんは太っていて力が強く、おもいきり背中を叩かれた僕は息が少し苦しくなった。

「たえちゃん。お母さんが迎えに来ましたよ」

先生がそう言いながら入ってきて、後ろにたえちゃんのお母さんが立っていた。たえちゃんのお母さんは若く、茶色い髪の毛をして短いスカートを履いていた。脚は驚くほど細く、僕のママとは違って膝が黒ずんでもいなかった。

たえちゃんはその脚に駆け寄って、まとわりついた。お母さんは気の無い感じで、何かたえちゃんではないものを見ていた。

その日の夜の儀式は、どういう訳かいつもとは違った。僕は必死に集中を高めようとしているのに、イメージは曖昧なまま僕のもとを離れた。それをたぐり寄せようとすれど、たえちゃんの丸っこい太い指のイメージが膨れ上がって、「知らない」という声が何度も聞こえた。

次の日も、僕は幼稚園で迎えを待たなければならなかった。たえちゃんは、僕が何も

言っていないのに「知らないから」と言ってお絵かきを始めてしまった。

への字になったたえちゃんの口を見ていると、僕は無性に苛立ちを感じた。そして復讐をしたいと思います。それはハサミを盗まれたことへの復讐ではなかった。たえちゃんを突き飛ばしたときも、ゆうたくんの鍵を隠したときも感じなかったどろどろとした感情が僕の中に芽生えた。

「ちよつとだけ外に行ってみようよ」

部屋から出てはいけないう決まりだったが、今は先生はいない。問題ない、今まで通りにやればいい、と僕は思った。たえちゃんは少しだけ訝しんだ様子だったが、黙って僕の後についてきた。

「ねえ、何するの？」

裏庭まで来たとき、たえちゃんは聞いた。

「ゲーム。たえちゃんが買ったなら、僕のクッキーとジュースをあげる。今日の分と明日の分も」

そう言うとなえちゃんは嬉しそうに顔を輝かせて、どんなゲーム？と尋ねた。

「あそこにあるバケツに、ここから石を投げて当てたら勝ち」

バケツは水飲み場のコンクリートの上にあった。そして、その背後には窓ガラスがあった。簡単なことだった。僕は水飲み場の高さより高く石を投げなければいよいよ。あとはたえちゃんがいつか勝手に窓ガラスを割る。

「よーいスタート」

僕はゲームの開始を一方的に宣言して、小石を投げた。一投目はまだ要領がつかめず、小石は水飲み場のはるか手前で落ちた。たえちゃんは僕に負けじと、小石を掴んで力いっぱい投げた。石は水飲み場のコンクリートに当たって、高い音を立てた。僕のもくろみ通りだった。

その後も僕達は交互に投げ続け、たえちゃんが4つ目の石を投げたとき、計画は見事に成功した。あつ、というの小さな声とともに投げられた石はバケツの脇を通り過ぎ、そのまま背後の窓ガラスに当たった。影の中のガラスには、蜘蛛の巣が張ったように細かい亀裂が走った。

その瞬間、たえちゃんは大きな声で泣き始めた。うずくまってわんわんと泣いて、地面にはよだれだか鼻水だかわからない液体が垂れた。僕は喜びのあまり全身に鳥肌が走って、身震いした。

しかしつかの間、たえちゃんがひつくひつくと嗚咽まじりにこんなことを言った。

「いい子にしてなきゃ、捨てられちゃう」

また地面に液体がたれた。今度ははつきりよだれだった。自分が急に冷めていくのがわかった。たえちゃんのお母さんの、あの真っ白な膝が頭に浮かんだ。愛情の欠如、という言葉が僕の頭の中で、マヌケな響きで鳴った。

僕は目の前に現れた、巨大な蜘蛛の巣を見上げた。日は傾き、影はその色を濃密にした。ヒビ割れたガラスの端々が、弾力を持った糸のようにつややかに光った。

「うるさい。バカ」

僕はそう言って、近くにあった握りこぶしほどの大きさの石を掴んだ。石は固く握りしめる僕の力を跳ね返すように、僕の手のひらにそのざらついた肌を容赦なく食い込ませた。これまで僕が大切にしてきた空白が、汚く濁っていくのがわかった。それもこれも全部、たえちゃんのよだれや鼻水のせいだ。

僕は力の限りを込めて石を投げた。石は窓ガラスを突き破り、その後ろの壁にまでぶつかった。壁に飾られた消防署の絵の一枚が、ひらりと落ちた。